

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00891

研究課題名（和文）異文化間能力の育成を目指したフランス語教授法の開発とその効果検証

研究課題名（英文）Development of FFL (French as a Foreign Language) teaching method aimed at fostering Intercultural Competence and its effectiveness

研究代表者

茂木 良治 (MOGI, Ryoji)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：40507985

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、複数の外国語を学ぶ日本人学習者が異文化間能力の育成を目指したフランス語教育を経験することで、どのように異文化に気づき、彼らが異文化に対してどのような態度をとるのかを検証した。この効果検証を通して、言語の知識とスキルの習得を超えて、異文化間能力の育成をも含めたフランス語教授法の開発を目指した。具体的には、文献調査を通して異文化間能力の育成を目指した外国語教育の多数の実践について分析を行い、指導法や評価法を調査した。先行研究から得られた知見から、日本のフランス語教育の文脈を考慮しつつ、異文化間能力の育成を目指す授業実践をデザインし、実践について評価を行い、教授モデルの構築を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語の学びを通して身につけた視野の広がりや態度の変化など異文化間能力の涵養の重要性が謳われる一方で、近年の外国語教育では言語運用能力の向上を優先するあまり、異文化間能力の育成が外国語教育から切り離される傾向がある。本研究では、言語運用能力と異文化間能力を統合的に扱う指導を通して、異文化間能力を育成し、評価する方法を検討した。さらに、本研究の分析対象者は英語を学んだ経験を有する複数言語学習者である。第二外国語を学び、日本や英語圏とは異なる文化に触れることによる、異文化への態度を調査した。

研究成果の概要（英文）：The object of the present study is to examine how Japanese learners of multiple foreign languages become aware of other cultures and what attitudes they develop toward them when they experience French language teaching aimed at fostering intercultural competence. We aimed to develop FFL (French as a Foreign Language) teaching method that includes not only the acquisition of language knowledge and skills, but also the development of intercultural competence. Specifically, (1) through a literature review of previous studies, we analyzed a variety of foreign language teaching practices aimed at fostering intercultural competence, and investigated teaching and evaluation methods in this field. (2) Referring to the findings from previous studies, we designed classroom teaching/learning activities aiming at fostering intercultural competence, taking into account the context of FFL teaching in Japan, verified them, and built a teaching model.

研究分野：応用言語学

キーワード：フランス語教育 異文化間能力 複言語・複文化能力 外国語教授法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、国際社会で活躍できる人材の育成が謳われ、外国語コミュニケーション能力および異文化間能力 (compétence interculturelle) の育成が教育機関における喫緊の課題となっている。しかしながら、日本では言語スキルを重視した英語教育の強化に重きが置かれ、言語や文化の多様性を尊重する態度を育成するような異文化間教育が充分になされているとは言えない(鳥飼, 2016)。ヨーロッパでは、ヨーロッパ市民の相互理解を促すための役割を外国語教育が担っているとみなし、外国語を教える中で異文化間能力を育成させる立場をとる。Byram (1997) は異文化間能力モデルを提唱し、異文化間能力は「知識 (savoirs)」、「態度 (savoir être)」、「解釈と関連づけのスキル (savoir comprendre)」、「発見と相互交流のスキル (savoir apprendre/faire)」、「批判的な文化的気づき (savoir s'engager)」の5つの要素で構成されていると定義し、これらの5つの構成素に働きかけるような外国語学習活動を通して、異文化間能力の育成を試みている。日本の外国語教育においても、日本の文脈を考慮しながら、言語の知識とスキルを超えて異文化間能力を含めた指導法を開発する必要がある。

また、日本の外国語教育に多大な影響を与えている「ヨーロッパ言語共通参照枠(以下、CEFR)」(Conseil de l'Europe, 2001)において、一つの外国語しか学ばないと、多様性を理解するどころか、逆にステレオタイプや先入観が強化され、民族中心主義に陥る危険性があるが、複数の外国語を学び、複数の文化を体験することで、民族中心主義を克服し、文化相対主義的な立場で言語的・文化的多様性を尊重する態度を育てることができると、異文化間能力の育成のために複数の外国語を学ぶことが重要であると指摘されている。

そこで、本研究では、これらの先行研究の視点に立ち、複数の外国語を学ぶ日本人学習者に対して、異文化間能力の育成を目指した外国語教育をどのように実施することができるのか検討した。また、異文化間能力の育成を目指す授業実践を通して学習者がどのように異文化に気づき、そして、彼らの異文化間能力がどのように成長するかを調査することを目指した。

2. 研究の目的

(1) 異文化間能力の育成を目指した外国語教育の授業実践が行われているヨーロッパの事例を分析し、どのような教材を使用し、どのような指導法によって異文化間能力の育成を促しているのか、そしてどのように異文化間能力を評価しているのか先行研究から調査し、明らかにする。

(2) 日本のフランス語教育の文脈を考慮に入れながら、(1)で記した文献調査から得られた知見を参考にし、異文化間能力の育成を目指す授業実践(学習活動)をデザインし、実践を通して、その効果について検証を行いながら、異文化間能力の育成を目指したフランス語教授モデルの構築を図る。

3. 研究の方法

(1) 異文化間能力の育成を目指した外国語教育の授業実践は、ヨーロッパの国々を中心に行われている。欧州諸国の書籍・学術論文・報告書などを調査した。これらの文献調査を通して、授業実践の事例を分析し、どのような教材を使用し、どのような指導法によって異文化間能力の育成を促しているのか、そしてどのように異文化間能力を評価しているのかなどについて検討した。

(2) 日本のフランス語教育の文脈を分析することから始め、文脈を考慮に入れながら、文献調査で得られた知見を参考にしながら、異文化間能力の育成を目指す授業実践をデザインした。具体

的には、学習者自身がネイティブスピーカー向けの資料 (Documents authentiques) などの分析を通して文化的相違などに気づく活動を取り入れ、その文化的差異について省察やクラスメートとの議論を通して深化させる指導法を取り入れた授業をデザインした。また、異文化間能力の育成だけに特化するのではなく、文法・語彙など従来のフランス語の授業で扱われる学習活動との融合を意識した授業デザインとした。これらの授業実践を通して学習者がどのように異文化に気づき、異文化に対してどのような態度をとるかなどアンケートや学習ジャーナルを通して観察した。

4 . 研究成果

(1) 異文化間能力の育成を目指した外国語教育の授業実践では、どのような教材が使用され、どのような活動が行われているのか、ヨーロッパ諸国で行われている実践報告を、書籍・学術論文・報告書などの文献から調査した。異文化間能力の養成を目指した外国語教育の実践の多くは、文学作品・ビデオ・音声など教材として加工されていないネイティブスピーカー向けの資料を理解することから始め、2 つもしくは3 つの文化を比較するような学習活動が取り入れられていることが分かった。ネイティブスピーカー向けの資料を使用しながら、外国語での言語産出活動を実践しており、学習者は既に高い外国語運用能力 (CEFR の B2 ~ B2 + 程度) を有していることが前提になるケースが多数みられた。CEFR の A1 程度の外国語運用能力の学習者を対象とした実践では、目標言語で教材は提示するものの、異文化間能力の育成に関わる活動においては母語を積極的に活用し、異文化への気づきや異文化に対峙した時の態度などを内省するように促していた。授業実践の分析からもわかるように、教育機関でこれまで実施されてきた知識伝達型の講義形式の授業では異文化間能力の育成は難しく、「体験」「比較」「分析」「省察」「行動」を含む学習活動を通して養成することが重要となる (Barrett et al., 2014)。

異文化間能力の評価に関しては、外国語運用能力で広く採用されているテストにより到達度を測定する数量的評価はそぐわないとされ、カリキュラムやコースに沿った到達目標を設定し、クライテリオン準拠評価を採用する必要がある。また、学習者による自己省察を促す自己評価を含む継続的で質的な形成的評価によって、異文化間能力の発達を促すことが重要であることが分かった。

(2) (1)の先行研究の文献調査を通して得られた知見を考慮しつつ、日本におけるフランス語教育という文脈を想定し、異文化間能力の育成を目指したフランス語の授業実践 (フランス語教授法) を検討した。授業実践をデザインする上で、日本の高校や大学でフランス語を学ぶ初学者 (CEFR の A1 レベル) を対象に、どのように異文化間能力の育成を目指すか検討し、第二言語習得論におけるインプットからアウトプットへの流れを考慮した語彙・文法学習モデルを構築した。この語彙・文法モデルを取り入れたことで、文化的相違などを含んだ異文化に関する内容の提示 (社会文化項目) 語彙・文法 (言語項目) コミュニケーション活動 文化の気づきについての振り返り (省察活動) を有機的に繋げた授業実践をデザインできるようになり、多数の学習指導案を作成するに至った。

これらの学習指導案に基づき中等教育において授業実践をおこない、授業観察、アンケートへの回答および学習ジャーナルの執筆を通して、学習者がどのように異文化に気づき、異文化に対してどのような態度をとるかなど調査した。その結果、学習者の多くが「文化の学び」に関して肯定的に評価していた。また、学習ジャーナルでは文化の多様性であったり、他文化への強い関心などを示した記述が多数みられ、学習活動を通して、複数の外国語を学んでいる学習者の異文

化に対する興味を促進したことが示唆された。

<参考文献>

Barrett, M., Byram, M., Lázár, L. Monpoint-Gaillard, P., & Philippou, S. (2014). *Développer la compétence interculturelle par l'éducation*. Conseil de l'Europe.

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters.

Conseil de l'Europe. (2001). *Cadre européen commun de références pour les langues*. Conseil de l'Europe.

鳥飼玖美子(2016)。「グローバル人材からグローバル市民へ」齋藤兆史他(編)『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』(pp. 39-61), ひつじ書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 茂木良治 | 4. 巻 111 |
| 2. 論文標題 外国語教育においてどのように異文化間能力を養成するのか - 学習活動と評価法からの考察 - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 アカデミア 文学・語学編 | 6. 最初と最後の頁 109-131 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 茂木良治・武井由紀・野澤督・松川雄哉・中野茂・菅沼浩子・山田仁 | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 『フランス語の学習指針』に基づく授業実践の評価と検証－語彙・文法学習モデルの効果検証を中心に－ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 複言語・多言語教育研究 | 6. 最初と最後の頁 89-105 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅沼浩子、茂木良治、武井由紀、野澤督、松川雄哉、山田仁 |
| 2. 発表標題 多様な評価方法を取り入れたフランス語授業 - 『フランス語の学習指針』に基づいた授業の実践報告より - |
| 3. 学会等名 日本フランス語教育学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 野澤督・武井由紀・菅沼浩子・茂木良治・松川雄哉・中野茂・山田仁 |
| 2. 発表標題 学習指導案を共有する - 『フランス語の学習指針』に基づく授業の指導案 |
| 3. 学会等名 Journee pedagogique de la langue francaise 2020 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 野澤督・山田仁・武井由紀・茂木良治・松川雄哉・菅沼浩子・中野茂 |
| 2. 発表標題 『フランス語の学習指針』のホームページ紹介とその活用法 |
| 3. 学会等名 第35回関西フランス語教育研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 茂木良治、中野茂、武井由紀、菅沼浩子、野澤督、松川雄哉、山田仁 |
| 2. 発表標題 日本の中等教育におけるフランス語教育を考える - 「フランス語の学習指針」ver.1 完成報告 - |
| 3. 学会等名 日本フランス語教育学会 2019年度大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 茂木良治 |
| 2. 発表標題 中等教育・高等教育におけるフランス語教育の現状と課題 |
| 3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会 2019年度東北支部大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 茂木良治、松川雄哉、菅沼浩子 |
| 2. 発表標題 『フランス語の学習指針』における語彙・文法学習 |
| 3. 学会等名 Journee pedagogique de la langue francaise 2019 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 茂木良治、武井由紀、野澤督、菅沼浩子、中野茂、山田仁、松川雄哉 |
| 2. 発表標題 社会文化項目を取り入れた授業デザイン - 「フランス語の学習指針」を活用して - |
| 3. 学会等名 第33回関西フランス語教育研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 武井 由紀 (TAKEI Yuki) (80620533) | 名古屋外国語大学・外国語学部・教授 (33925) | |
| 研究分担者 | 野澤 督 (NOZAWA Atsushi) (50773438) | 大東文化大学・外国語学部・講師 (32636) | |
| 研究分担者 | 古石 篤子 (KOISHI Atsuko) (20186589) | 慶應義塾大学・総合政策学部(藤沢)・名誉教授 (32612) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|